
戦争...そして

梅トマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争：そして

【Nコード】

N2183D

【作者名】

梅トマト

【あらすじ】

過去の大戦争。その十年後の世界。まだ戦争の傷が残る世界で刹那の運命は！？

第一話

「戦争って…こんななんですね」

「ああ…こんな戦争早く終わらせるんだ。戦争は悲しすぎる」

「早く…そうだな」

「早く起きないと遅刻ですよ！？刹那兄さん！！」

「んあ？」

「んあ？じゃありません！早くしてください！！」

「ああ悪いな綾乃。先に行ってもよかったんだぜ？」

「兄さんは私が起こさないと遅刻でしょう？」

綾乃。俺の妹。とてもよくできた妹だ。

「早くしてください！本当に遅刻ですよ！？」

「悪い！今着替え終わった！学校いくぞ！」

学校。もはや学校であって学校ではない。

十年前に起こった大戦争。二度目がないとは限らない。

だから学校では剣術、魔術など対抗しうる力を身につける場所とな

ったのだ。

「兄さんはいつも遅刻ぎりぎりなんですから！」

「綾乃はいつも余裕だな」

「もちろんです！どうして兄さんにできないのか不思議ですよ」

学校についてしまった。地獄だ。帰りたい。

「兄さん？まさか帰りたいなんて…？」

「おもってない！さあ今日もガンバロ〜！じゃあな綾乃！」

俺は振り向かず走り出す。

綾乃は怒り出すと怖い。逃げろ！逃げろ俺！

「おはようございます」

「おい刹那！また遅刻ぎりぎりか！？」

「間に合っただからいいじゃないですか」

席に着く俺。

ああ今日も何も無い一日が…

「刹那あ 一時間目の剣術実践勝負だあ！！」

ああ急にイベント…

「綾乃ちゃんかけて勝負だあ！！」

「朝からうるさいぞ？夜^{ヤト}兎。まあ綾乃を賭けられたら受けるしかない！絶対に渡さん！」

「おいおいヤト。お前に勝てるわけないだろ？」

「詩帆やってみないとわからんぞ！？」

「そんなことよりヤト、刹那トレーニングルーム行くぞ?」

「すー…すー」

「寝てんじゃねえ!!」

バキッ!

いつてえ…詩帆のやつ本気でやりやがったな…
何度くらってもいてえよ…

「ようしみんな来たかあ?」

「せんせーはやくやるーぜー。今日こそ刹那をぶっ飛ばして綾乃ち
ゃんもらうんだよー!」

「ヤトには無理だな。まあいい。みんなそれぞれ実践始めてくれ」

せんせーの合図とともにヤトは刹那に向かい走る。

「刹那あゝ覚悟〜!」

「遅いなあヤト」

刹那はすでにヤトの後ろにいた。

「なんでお前はそんなにはやいんだよ〜」

「お前がおせえんだよ!」

バキッ! ドカツ!

「せんせーヤトが死んだあ」

「ほつとけほつとけ」
「お前らひでえよ…」

そんな話をしていると詩帆が近づいてきた。

「おい刹那私の相手をしろ」
「いやだ」
「問答無用！」
「おたすけ」

刹那は詩帆に追っかけられる。
ちなみに振るっているのは木刀。さすがに真剣はあぶないのでということだ。

「疲れた」
「綾乃ちゃん。うえ〜ん」
「ヤトうるさい！刹那本気で剣を振るわなかったな？」

なんで詩帆にばれてんだよ！？

「なぜそう思うのですか？」
「私がお前に勝てるわけないだろ！」

なんだそれ〜！じゃあ挑むな！

「ところで詩帆次の教科は？」

「歴史」

「おやすみ」

「寝るな」

バキッ！

時は昼休みの屋上

「めしめし」

「刹那が元気出るときってご飯時だけよね」

「詩帆！俺も元気だ！」

「ヤトはどうでもいい」

「ガーン」

イチゴミルク飲みてえなあ
あれっ？

「しまったあゝ！！！！」

「なに！？」

「弁当忘れた」

「兄さん！！」

「うわっ！びっくりした！綾乃かよ」

「兄さんお弁当忘れたでしょ？持ってきてあげましたよ？」

「さすがが妹」

そんななかにはいつてくるやつが一人…

「綾乃ちゃん」

「あらヤトさんこんにちわ」

「あいたかったよぉ」

バキッ！ドカツ！ゲシッ！

「いってえ！せつなあなにすんだよぉ！」

「お前死にたいのか？」

刹那の殺気はほんものだった。

当然ヤトは…

「ごめんなさい」

「兄さん何もそこまで…」

「綾乃こいつはとことんやつとかなきやいけないんだよ」

そんな楽しいお昼でした。

帰り道。

「疲れた…」

「お前は一日寝てたようなものじゃないか」

「詩帆さん兄さんは一日寝てたのですか？」

「ああそうだ」

「兄さん…わかってますね？」

「ごめんなさい！」

「あんなにやんなくつてもいいじゃんよ」
「兄さんがまじめにならないからです！」

ここは刹那の家。

喧嘩の声が聞こえる。

「だからそれは」

「だからじゃありません！！」

「もう綾乃は。ちよつと出かけてくるわ」

「ちよつと兄さん！？」

刹那は家をでる。

そこには女が立っていた。

「わるいな。待ったか？ 柊」

「いいえそんなことないわ。それより妹さん…」

「いつもの事ださあいこうぜ。遅刻だ」

そういうと刹那と柊は夜の闇に消えていった。

第二話

「刹那…また遅刻…」

「ごめんね。姫」

ここは町外れの森林。

刹那たちが来たときは純白のコートを身に着けた2人が立っていた。

「柊は刹那を連れてきたんだよね？」

「刹那は遅刻魔君だからね」

「で？今日の任務は？」

「ああ。やつら…『黒炎の歌』の研究所を見つけた。直ちに向かい破壊する。」

「龍也はまじめ君だなあ。」

「いつも遅刻のお前とは違うのだ。さあいくぞ。場所はここから北に向かえばいずれ見える」

「いずれ見えるって…もういないし」

「みんな…いったよ…？いこ」

「ああ姫。いくか」

ザッ！

刹那たちは後を追う。

研究所とは…？そして『黒炎の歌』とは？

「ここか…」

「刹那…いかないと…おいてかれるよ…？」

「そうだな」

そこは人が一人もないような町外れの倉庫。

ザッ！

刹那たちの後ろから物音がした。

「だれ…？」

「ここを嗅ぎ付けたのはほめてやろう。しかしここでおわっ…？」

「おせえ…」

刹那はいつの間にか出てきた男の後ろにまわっていた。
そして男の心臓には純白の剣が突き刺さっていた。

「姫いくぞ。遅いとまた柊達になんか言われる」

「うん…」

そして薄暗い倉庫の中をどんどん進んでいく。

「遅いじゃない刹那」

「色々合ったんだよ！」

「おい静かにしろ。ついたぞ」

そこには大きなコンピューター。そこに一人の男が立っている。
カタカタとコンピューターをいじる音が聞こえる。
そこを物陰に隠れて見物する。

「Z・ロイドの研究だ」
ゼータ

「っ！？あんな物をまだ！？」

「柊静かに」

「刹那？」

「龍也いくぞ？いいな？」

「刹那気をつける。何があるか分からん」

「刹那…援護…任せて」

「姫まかせた」

刹那は飛び出す。

Z・ロイド。別名侵食型ウィルスZ。

そのウィルスは人間に投与すればたちまち体を蝕んでいく。

しかし、それと同時に人間離れした身体能力を身につけることができる。

「おいそこまでだぜ」

「だ、誰だ!？」

「名乗るのか?めんどくせえな。純白の風No.ⅩⅠⅠⅠ刹那」

「純白の風だと!?!そうかこそもばれたか。だが手遅れだったな!」

「うるさい。しゃべるやつは長生きしないぞ?」

「ええいおまえがああⅩⅠⅠⅠの刹那だとしても関係ないわ!もうZ・ロイドを侵食させた人間は完成しておるのだ!」

奥にあったカプセルみたいな物が開く。

そこから出てきたのは紛れもない人間だった。

「それがZ・ロイドを侵食させた人間か。お前ら『黒炎の歌』は何がしたいんだ?」

「いいだろう!教えてやる冥土の土産だ!我らはZ・ロイドを使って反乱を起こすのだ!」

「反乱!?王都に反乱したらどうなるか!？」

「そつだ戦争だ!我らは十年前の大戦争をもう一度起こすのだ!」

「てめえらはどこまで腐ってんだよ!！」

ちよんちよん。

刹那と男の会話をみていた柊に姫子きこがつついてきた。

姫子はいつも刹那が姫と呼んでいる小柄な子だ。

「刹那…怖い…」

「どうしたのかな？刹那たしかに怖いな」

「さあお話は終わりだ！やれ！」

「Z・ロイド感染者。こいつもなりたくなっただんじやないよな？
今楽にしてやる」

刹那に感染者の剣が迫る。さっきの刹那のスピードを上回るスピードで。

「刹那！危ない！」

「まだいたか！そいつらもまとめてやってしまえ！」

ザッ！

「ふははっ！もうやってしまったのか！はい…な？」

「無痛の一撃。痛みはないはずだ。ゆっくり休みな…」

「きつ貴様は化け物か！？」

「化け物…か。そうかも知れんな…」

ザシュッ！！

「姫…？」

「刹那…化け物じゃない…！」

姫子の剣は確実に男の心臓を貫いていた。

姫子は怒っているみたいだった。

「ひめ…怒るなよ。俺が怒るときがなくなっちゃったじゃねーか」

「刹那…大丈夫…？」

「心配するなよ姫。それよりここ爆破して任務完了だよな？龍也」
「ああそうだな。もう装置はしかけてある。あとはここを出るだけだ。いくぞ柊」
「あ？ああ」

刹那たちは倉庫を後にする。

「戦争…絶対やらせるわけにはいけないな」

「刹那珍しくまじめだな？どうした？」

「うるせい！龍也おれは帰って寝るからな！明日学校だったのに…」

「ばいばい…刹那…」

「またな刹那」

「じゃあな姫、柊」

ここは刹那の家。

綾乃はすやすや眠っている。それもそのはず今は3時だ。

「綾乃…おやすみ」

刹那は自分の部屋の布団で眠りにつく。

「ああつかれた…」

第三話

「兄さん！！遅刻ですよ！！」

「ん～～ああ～」

刹那は眠い目を擦り、体をのばす。

「兄さん！また朝ごはん食べる暇がないじゃないですか！」

「綾乃は食ったろ？」

「もちろんです！玄関で待ってますのではやく準備をしてください！」

綾乃は部屋をでていく。刹那はだるそうに準備を始める。

「早くしてください！！」

綾乃が叫んでいる。刹那は急ぎ始める。

刹那が起きたのは8時。登校時間は8時20分。家から歩いて10分。さらに準備もろもろ……。つまりいつもぎりぎりなのだ。

「悪い。待たせた」

「兄さんぎりぎりです！」

「綾乃走るぞ！」

刹那は走る。綾乃も走る。

学校に着いたのは8時17分。ぎりぎりだ。

「じゃあ兄さんまた。いいですか？授業は……」

「寝ません！それじゃ！」

刹那はダッシュで教室にはいる。

「刹那くうゝんまたぎりぎりかい？」

「ヤトか。朝から元気だな」

「もちろん！大会近いし！」

「大会？ああ。おかしいよな新学年始まって早々にやるとか」

大会。刹那たちが通う学校は5月上旬に大会がある。

この大会、全学年参加でシャッフルトーナメントとなっている。そのため1学年が最高学年の4学年とあたることもあるのだ。

ちなみに刹那たちは今3学年。去年は刹那が2位の詩帆が3位だった。

おまけで言うところのヤトは5位。綾乃が1学年にして4位という高成績だった。

「刹那おまえにはまけねえぞ！」

「とりあえず綾乃に勝てるようになってから言ってくれ。おやすみ」

「綾乃ちゃんは魔術が…って寝るのはやっ…！」

刹那は眠りについた。そのときにせんせいがいってきた。

「おゝい今日はうれしい知らせだ。転校生がきたぞ。しかも可愛い女の子だぞ」

せんせいの言葉に周りの男子は「俺が貰った」とか「お前にはわたさね」とか「はやくしてくれ」とかさわいでいる。

刹那はというと…

「くかーくかー」

寝ていた。

「それじゃ入ってきてくれ」

「はい」

その子が入ってきたら周りの男子が「かわいい〜」とか「うわ〜ウチの学校の女子のなかでSSランクだ〜」とかわけの分からん事を言っている。

刹那は相変わらずだが。

「姫^{キコ}子…です…よろしく…」

とうとう周りの女子までもが騒ぎ出してしまった。「お人形さんみた〜い」とか「ちっちゃくってかわいい〜」とかいろいろだ。

刹那は…？

「くかー」

「おい刹那！おきろ！転校生だぞ〜！」

「ん〜。転校生の一人や二人で騒ぐなよヤト」

「おまえも見てみるよ。めっちゃ可愛いぞ！」

「ん〜って姫！？」

「あつ…刹那…」

刹那に向けられる殺意が混じった冷たい視線。
刹那はなるべく気にしないことにしていた。

「姫！？なんで？」

「…いろいろ」

「なんだ刹那と知り合いか？なら隣が開いてるから座れ」

刹那に向けられる殺意の視線。

「おまえら転校生きて浮かれてるのはいいが今日から大会に向けて剣術、魔術の授業増やすからなあ」

「なんだよそれ」というこえが教室中に響いた。

「おまえらに意見を言わせるつもりはない！さっさと練習場いけ！」

生徒達が移動しだした。刹那は？

「くかー」

「刹那…おきて…」

「くかー」

「キコちゃんこいつは寝たら起きないよ。こういつときは詩帆に」

「刹那…怒るよ…？」

「姫おはよう！」

「私の出番なくなっちゃった…早くいかないとせんせい怒るわよ？」

「いこう！」

ここはトレーニングルーム。大会に向けて練習しているクラスがたくさんみれる。

トレーニングルームはかなり広いつくりになっている。この学校は1学年7クラス。全28クラスになっているのだが、このトレーニングルームは10クラスは入る広さになっている。

さらにグラウンドもあるのだが…。

「兄さん！？」

「綾乃か？おまえのクラスも大会に向けて…ってか？」

「ええまあ…」

「綾乃ちゃん！」

「ヤト死ぬか？」

刹那の周りには殺気が…

「刹那…あの子…あのときの…？」

「姫そうだよ。」

「あの子…知っているの…？」

「…知らない…というか覚えていないと思う」

「兄さん？お手合わせ願えますか？」

「綾乃ちゃんそれは俺が」

「じゃあヤトおまえは私とな」

「げっ！詩帆かよ」

「兄さん？いいですか？」

「あっ？ああ」

トレーニングルーム。特殊な結界が張られていてどれだけ大きな衝撃の魔術でも中に留められる。上級生になると進んでここの一室を借りて魔術の練習をしている。

「では。兄さんおねがいします」

「よろしく」

その二人の周りには練習に来ていた生徒、先生たちが集まっていた。なんでも「去年の2位と4位がやりあうぞ！」といううわさで集まっていたらしい。

「いきますよ？」

「おう。ってうわ！」

綾乃は一瞬で刹那の懷に飛び込み一発きめようとする。しかし刹那の反射神経に阻まれる。

「まだまだ〜！」

「綾乃〜おちつけ〜ってうわー!!」

綾乃は得意の炎の属性による魔術で攻撃。

「兄さんはまだ魔術が苦手なんて言っているのですか!？」

「しかたないだろ〜!!」

そんな戦闘をしているとき姫子の携帯が鳴る。

「龍也…?」

「姫子。感染者が現れた。場所はお前がいる学校から西にいる」

「わかった…まかせて…」

姫子は携帯をポケットに戻す。

そして刹那に手招きをする。

「姫?なんかあったのか?」

刹那は姫子の近くにいく。

「刹那…感染者…」

「わかった」

それだけいうと刹那は綾乃の相手に戻る。

「兄さん？戦闘中に観客とお話ですか？余裕ですね？」

「綾乃時間がない。ごめんな。また今度ゆっくり相手してやる」

ちなみに試合のルールは簡単。

ブレスレットをする。このブレスレットは大きすぎる衝撃から1回だけ身を守る道具だ。一回耐えたら砕け散る。これを砕けば勝ち。もうひとつは気絶をさせれば勝ち。

「なにをまだ終わっていませんよ！？」

「いいや終わりだ」

刹那は一瞬で綾乃の後ろに回った。

気づくと綾乃のブレスレットは砕けていた。

「兄さん？何を？」

「なんも。じゃあまたゆっくりやろうな」

刹那は姫子と一緒に外へ出て行った。

ちなみに詩帆とヤトの勝負は詩帆の勝ち。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2183d/>

戦争...そして

2011年1月26日07時54分発行